ぞ、いださせ給て、御むまにたてまつりけるこそ、いとめづらしくゑにもかゝまほしく侍けれ、二條の大宮の女房、いだし車に菊もみぢの色々なるきぬどもいだしたるに、うへゑたに、ゑろぎきぬをかさねてぬひあはせたれば、ほころびはおほく、ぬひめはすくなくて、あつきぬのわたなどのやうにてこぼれいでたるが、きくもみぢのうへに、雪のふりおけるやうにて、いつくるまたてつゞけ侍けるこそ、見所おほく侍りけれ、

〔古今著聞集十四遊覽〕白河院、深雪の朝、雪見に御幸有べしとて、御供の人少々めさるゝ事ほのきこえし程に、やがて出御ありて、おもしろき雪かないづかたへかむかふべき、小野皇太后宮〇後冷泉后歡子のもとへむかはゞやと仰られけるを、御隨身承はりて、從者を馬にのせて、彼宮へはせまゐらせて、かゝる事にすでに御車奉りて候也、御用意候べしと申たりければ、紅の衣五具有けるを、せはりにふつときりて、寢殿十間になんいだされたりけり、みづから入て御らんずる事もあらばいかゞと申人有ければ、皇太后宮雪見る人は、内へ入事なしとて、さわぎたる御けしきなくてなんおはしましける程に、やがて御幸なりて、御車やり入て、階隱の間にさしよせておはしましければ、みきをなんすゝめ奉られける、朽葉のかざみきたる童二人、ひとりは沈折敷に、玉のさかづき、銀のさらに、金の橘一ふさをもられたるをもちたりけり、一人は片口のてうしに、さけを入て持たり、二人の童、寢殿のまへをへて、階の子をなゝめにおり下て、御車へまゐりけるさまいみじく優になん見え侍る、酒はうるはしうならせ給ける、橘は季道御供に候けるに給はせけり、上皇かへらせおはしましけるまゝに、ゆかしくなつかしき世にこそおはしましけれとて、莊一所まゐらせたりければ、只今御幸なるよしつげまゐらせたりける御隨身になんあづけ給ける、〇又見二十訓抄一

〔續世繼寢覺記〕中右記〕大治二年五月十四日、早旦三院〇白河、鳥羽、璋子、御幸鳥羽、有二田種興一云々、晩頭還御云々、或人示送